

米欧亜回覧

第45号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

国際シンポジウム
特集号(十二頁)

(真剣なセミナー参加者)

設立満十周年記念行事

国際シンポジウム、大盛会のうちに閉幕！

「亜」からの新しい視点も鮮明に……

「米欧亜回覧の会」設立十周年記念行事、国際シンポジウム「世界の中の日本の役割を考える」は、十一月二十三日(木・祝)から二十五日(土)までの三日間にわたり、国際文化会館、学術総合センターを各会場に行われ、晴天にもめぐまれ大盛況のうちに幕を閉じた。今回は、五周年の時と違って、岩倉使節団そのものよりも「現代」と「亜」にフォーカスを当て、

テーマも今日的なものとし、ゲストも「亜」を重視した。当会では、この一年半ほどの間に現代語訳「米欧回覧実記」の出版、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の制作、そして今回の「国際シンポジウム」の開催と三つの大きな事業をやり遂げたことになる。これらはいずれも当会の十年にわたる活動の集積の上に咲いた花であり、会員二百名の総合力の成果といえる。



11月23日・24日のセミナー会場
満席の国際文化会館ホール



(公開フォーラム受付)



25日の公開フォーラム会場の学術総合センター(上)・ホール(下)





開会挨拶 泉 三郎

開催の挨拶
 本会は本年度で設立から満十年になりますので、その記念行事としてこの「国際シンポジウム」を企画いたしました。それには、かねて親しくお教えをいただいている、三人の先生方、芳賀徹先生、五百旗頭真先生、松本健一先生に、企画の段階から参画していただき、このようなプログラムが出来あがった次第です。

設立満10周年記念
 国際シンポジウム特集

フォト・ドキュメント
 錦秋の3日間



総合司会
浅沼晴男
(当会幹事)

メインテーマの「世界の日本の役割を考える」については、いかにも大きく漠としていますが、副題にあります「近代西洋文明を超えるもの」という点にご注目をいただきたいのです。西洋文明のすばらしさはいまでもありません。今日のわれわれの豊かで便利な生活は、その多くが西洋文明のお蔭といってもいいからです。しかし、西洋文明にも欠点がありマイナスマ面があります。ですから、それを超えるにはどうしたらいいのか、それが今回のメインテーマであります。

それにはアジアの智慧や東洋の思想、あるいは日本の伝



統的な思想の中にその矛盾を解く鍵があるのではないか。そうした思いが、このテーマを取り上げた理由であり、アジアの各地からゲストをお迎えした理由であります。三日間にわたって内容のある議論がなされることを期待したいと思います。

泉三郎(当会理事長)



補助席まで満席のセミナー会場

11月23日(木・祝) 17:00~20:00 国際文化会館講堂
 DVD「岩倉使節団の米欧回覧」上映会



終了と同時に拍手が
わき起こる



第一セッションのあと同じ会場で行われたDVD上映会には、七十名近くが出席、休憩を挟んでの三時間にわたる「世界一周の旅」を見入った。前半に五章分八十八分、後半に四章分七十七分の上映が終わると、期せずして拍手がわき起こり、司会者から制作担当の足立光正氏、続いて泉三郎氏が紹介された。

11月23日(木・祝) セミナー第1セッション 13:10~16:30 国際文化会館
「岩倉使節団は日本の近代化に如何にかかわったか」

【11月23日・国際文化会館講堂】

◎セミナー開会 (13:00)

挨拶 泉 三郎 (NPO米欧亜回覧の会 理事長)
総合司会 浅沼 晴男 (当会幹事)

<セミナー第1セッション>

◎第1セッション開会 (13:10)

司会 桑名 正行 (当会幹事)

◎基調講演 芳賀 徹 (京都造形芸術大学学長)

テーマ: 一線の血路を開く
~十九世紀日本の精神史的文脈における
岩倉使節団

◎報告 齋藤 希史 (東京大学大学院助教授)

テーマ: 漢文脈の中の米欧回覧実記

◎報告 巖 安生 (大手前大学大学院教授)

テーマ: 「先知先覚」者の面する進歩か自滅かの道
—米欧回覧実記と郭嵩燾の「倫敦日記」

◎報告 ウィリアム・ステイール (国際基督教大学教授)

テーマ: 日本の文明開化の光と影 —久米邦武の歴史観

◎報告 山崎 渾子 (聖心女子大学教授)

テーマ: 岩倉使節団とキリスト教 —近代化とのかかわり

◎閉会 (16:30)



第1セッション・基調講演
芳賀 徹 氏

19世紀日本の精神史的文脈における
岩倉使節団

セミナーは定員八十名のところ、両日ともに補助席がでる有様で、百名近い出席者で熱気のこもったものになった。第一セッションで芳賀氏は、岩倉使節団の前史とも言ふべき精神史、幕末すでに多くの先覚者が危機感をつのらせ命を懸けて「一線の血路を開く」(渡辺華山の言葉)活動をしていたことを紹介。巖安生氏は中国でも同時代、駐英公使ともいうべき人物がいて、久米邦武にも勝る

記録を残したが、時の政府が聞く耳をもたず埋もれてしまった事実を報告、日中の国情的の違いを鮮明にした。そして参加者は各講師の多面的な報告に聞き入り、「非常に面白かった、たいへん勉強になった」との感想を述べている。



齋藤 希史 氏 (写真右)
漢文脈の中の米欧回覧実記



巖 安生 氏 (写真左)
「先知先覚」の面する進歩か自滅かの道
—米欧回覧実記と郭嵩燾の「倫敦日記」



司会 桑名正行
(当会幹事)



ウィリアム・ステイール 氏
(写真右)

日本の文明開化の光と影
—久米邦武の歴史観

山崎 渾子 (会員)
岩倉使節団とキリスト教
—近代化とのかかわり



11月24日(金) セミナー第2セッション 10:00~12:50 国際文化会館

「日本近代化130年における成功と失敗」



ケント・カルダー氏
「損なわれた対話」を乗り越えるために
—今後の日米関係



バクティアル・アラム氏
日本の近代化とインドネシア



第2セッション・基調講演
五百旗頭 真氏
日本近代化130年における成功と失敗

五百旗頭氏は、近代日本百三十年の歩みを、その成功と失敗の歴史として明快に解説、参加者に感銘を与えた。アラム氏は見事な日本語で、インドネシアの近代化における宗主国オランダへの留学生の役割や日本の近代化の与えた影響について述べ喝采を浴びた。また各講師の論述はそれぞれに内容があり時間の制限が恨めしかった。でも、参加者から「この大きなテーマについて概要を理解できたのは嬉しかった」との感想がもれた。

【11月24日午前・国際文化会館講堂】
＜セミナー第2セッション＞
◎第2セッション開会(10:00)
司会 藤原 宣夫(当会幹事)
◎基調講演 五百旗頭 真(防衛大学学校校長)
テーマ: 日本近代化130年における成功と失敗
◎報告 バクティアル・アラム
(インドネシア日本研究協会会長)
テーマ: 日本の近代化とインドネシア
◎報告 ケント・カルダー
(ライシャワー東アジア研究センター所長)
テーマ: 「損なわれた対話」を乗り越えるために
—今後の日米関係
◎報告 井出 亜夫
(日本大学グローバル・ビジネス研究科教授)
テーマ: アジア共同体と日本近代化の経験
◎閉会(12:50)



司会藤原 宣夫
(当会幹事)



井出 亜夫(会員)
アジア共同体と日本近代化の経験



外務省事務次官
谷内正太郎氏

第三セッションが終わったあと、同会館にある美しい庭に面した榊山ホールでレセプションが行われ、来賓の方々、三先生はじめ海外からのゲストスピーカーのみならず、そして会員など七十名近くが出席、酒食の間にさかんに交歓し、懇親を深めた。来賓の外務省事務次官の谷内正太郎氏の挨拶のあと、元駐米大使の大河原良雄氏の乾杯の音頭で杯をあげた。セミナーでは質問の時間が少なかつたこともあり、このパーティーはそれを補う意味でも有意義だった。

懇親会

【11月24日・国際文化会館宴会場】

◎開会(18:00)
来賓ご挨拶
司会 山田 哲司(当会副理事長)
◎閉会(20:00)

11月24日(金) セミナー第3セッション 14:00~17:30 国際文化会館

「グローバル社会における日本の役割とは何か」

【11月24日午後・国際文化会館講堂】

＜セミナー第3セッション＞

◎第3セッション開会(14:00)

司会 泉三郎(当会代表)

◎基調講演 松本健一(麗澤大学教授)

テーマ: グローバル社会における日本の役割とは何か

◎報告 国分良成(慶應義塾大学法学部教授)

テーマ: 東アジアから見た日本と日本から見た東アジア

◎報告 ラウ・シン・イー(麗澤大学教授)

テーマ: アジアにおける日本のリーダーシップ

◎報告 ベルト・フィッシャー

(在日ドイツ大使館首席公使)

テーマ: Japan and Germany、
Partnership in Improving the Global Society

◎報告 塚本弘(日本貿易振興機構副理事長)

テーマ: 開発途上国の産業発展への貢献

◎閉会(17:30)



司会
泉三郎
(当会代表)



第3セッション・基調講演
松本健一氏
グローバル社会における
日本の役割とは何か

松本氏はグローバル社会の現
状とアジアの状況、そしてその
中での日本の役割について述
べ、各講師もそれぞれの立場か
らテーマに沿った貴重な報告が
あった。また、本シンポジウム
では、外国人もすべて日本語で
ということであったが、フィッ
シャー氏だけは英語の発表とな
った。なお、本セミナーでは
パワーポイントがしばしば使わ
れたが、非常に効果的で、とく
に塚本氏のアフリカでの日本人
の活躍を伝える映像は新鮮だっ
た。



塚本弘(会員)
開発途上国の産業発展
への貢献



ベルト・フィッシャー氏
Japan and Germany、Partnership
in Improving the Global Society



ラウ・シン・イー氏
アジアにおける日本のリーダーシップ



国分良成氏
東アジアから見た日本と
日本から見た東アジア



元駐米大使
大河原良雄氏

11月25日(土) 公開フォーラム 学術総合センター
「世界の中の日本の役割を考える」 —近代西洋文明を超えるもの—



(当日参加者も多数)

三日目の公開フォーラムは、一橋の学術総合センターの講堂で行われ、三百数十名が出席し、午前十時から昼食をはさんでの午後五時半までの長丁場を熱心に聴講した。午前の部で、芳賀徹、五百旗頭真、松本健一の三先生から基調講演があり、午後のパネルドスカッションでは国分良成先生の司会で海外からのパ



実行委員長挨拶
泉 三郎 (当会代表)

ネリストから貴重な意見が出されたが、いずれも日本語で話され、通訳を必要としなかったのは有り難かった。講演の部では、芳賀氏が十九世紀日本に焦点を当て、今こそ江戸時代の平和システムから学ぶべきだと論じ、五百旗頭氏は二十世紀の日本を総括してその成功と失敗を論じ「これからの日本は穏やかな自信を持ち、世界の良き世話役になるべきだ」と述べ、松本氏は二十一世紀の日本は、アジアに共通な価値観としての湿潤な「泥の文明」から生まれた「共生」を指針にするべきではないかと論じた。また午後のパネル・ディスカッションでは、アジアの各国からの参加者を中心に貴重な意見が寄せられ、アジアと世界における日本の演ずべき役割についていくつもの提言があった。読売新聞は十二月十三日朝刊の文化欄で泉田友紀記者の記事を載せている。そのタイ

【11月25日・学術総合センターホール】

＜午前の部＞

- ◎開会 (10:00)
挨拶 泉 三郎 (シンポジウム実行委員長)
総合司会 井出 亜夫 (当会幹事)
- ◎基調講演 芳賀 徹 (京都造形芸術大学学長)
テーマ: いま、ふたたび「徳川の平和」に学ぶ
- ◎基調講演 五百旗頭 真 (防衛大学学校校長)
テーマ: 近代日本の明暗
—「脱亜」と「脱欧」を超えて
- ◎基調講演 松本 健一 (麗澤大学教授)
テーマ: 21世紀文明の理念「共生」
- ◎午前の部終了 (12:30)



総合司会
井出 亜夫
(当会幹事)

トルは「シンポ『世界の中の日本の役割』岩倉使節団に探る羅針盤」で、その最後はこう締めくくられている・・・。「不安な時代に国の進路をどうとるか。明治維新からわずか四年という混乱の時期に勇躍大海へとこぎ出した使節団の軌跡が、混乱の中を手探りで進む現代の私たちに一筋の光を与えてくれているように感じた」



松本 健一氏



芳賀 徹氏

【11月25日・学術総合センターホール】

＜午後の部＞

◎パネルディスカッション開会 (13:30)

司会 国分 良成

基調講演へのコメントおよびパネリスト紹介

◎各パネリストより意見発表

バクティアル・アラム (インドネシア日本研究協会会長)

周 見 (中国社会科学院・世界経済政治研究所教授)

崔 相龍 (高麗大学校政治外交学科教授)

アフターブ・セット (元駐日インド大使)

ケント・カルダー

(ライシャワー東アジア研究センター所長)

◎パネリスト間の意見交換 (13:45)

◎司会者より問題提起

◎各パネリストの補足意見発表

◎芳賀、五百旗頭、松本 各氏のコメント

◎各パネリストの補足意見発表(2回目)

◎総括 五百旗頭 真

◎まとめと挨拶 山田 哲司 (当会副理事長)

◎閉会 (17:30)



パネルディスカッション司会 国分 良成 氏



耳を傾ける出席者 (質問による参加も)



- 5人のパネリスト
(○写真左から)
- ・ケント・カルダー
 - ・アフターブ・セット
 - ・崔 相龍
 - ・周 見
 - ・バクティアル・アラムの各氏



総括 五百旗頭 真氏



5カ国のパネリストと司会の国分氏 (左端)

山田 哲司 (当会副理事長)

三日間合計、約二十四時間の国際シンポジウムで、延べ五百名の方にご出席いただきました。そして、国際交流基金、東芝国際交流財団、サントリー文化財団、この三団体様には資金の面からご支援をいただきました。また、読売新聞社からは文化面で記事の紹介等で大変お世話になりました。

単にアジアの関心や理解を深めるだけではなく、将来、国境が低くなることを想定して、市民社会の確立を問題意識の中に捉え、例えば文化的な交流、環境、省エネ、地域格差や教育などの共通問題に対して具体的な提案をしていくことが非常に大事なことでないかと考えています。

各先生方との信頼関係をもとにして今日のようなプロジェクトを協力して行うことができた、その達成感、連帯感、は例えようもないものがございます。本当にありがとうございます。



副理事長 山田 哲司

国際シンポジウム・スナップ

(国際シンポジウム写真)
橋本 吉信、鶴飼 直哉



記録係の小林さん、足立さん



佐久間象山の拓本を説明する井出さん (24日)



紅葉の朝、総合学術センター
近くのお堀で (25日)



講師紹介チラシを確認 (23日)



大人数にレジュメの配布 (23日)



昼休みも受付は対応 (25日)



気さくなB・アラムさんと記念撮影



300人にお弁当を配る



ロビーでくつろぐ (25日)

外からの声・内からの声 (アンケートより)

外からの声

◆これだけの内容のシンポジウムをボランティアだけでやり遂げるといえるのは、すごいことです。

◆基調講演ははずれも中身濃く、示唆に富むものであった。時間が各々足りなかったようであるが、期待どおりであり満足できるものである。また、各パネリストの日本語力もさることながら内容的にも充分なものであった。

◆公開フォーラムは大変レベルが高い内容で面白かった。若い人に聞いてもらうのにどうするかが問題。

◆特にバクティラム・アラム氏、アフターブ・セット氏の見識、表現力が高く敬服した。国分先生の司会ぶりに感服。

◆これだけの会なら、もっと若者を呼び込むべきだった。

◆今後の日本の役割を議論する上で、他国の意見を考慮することは不可欠だと思えます。せつかく各国から代表が集まっていたのだから、それぞれの間の対話をもう少し聞きたかったと思う。

◆一流の講師による充実した内容のシンポジウム。構成もよかった。アジアの平和、世界の平和を図るためにも

◆

リズムの進展が一層重要だと認識した。

◆問題点といえば、やはり時間管理でしようね。それによって会場からの質問や意見にどこまで時間を使えるかが決まってきますから・・・

◆芳賀先生のコメントはすばらしく、わかりやすいものでした。DVDも本当に貴重で日本の財産です。

◆昼休みのビデオ上映時間をもっと欲しかった。

◆食事は美味しく、適量。もっとも若者にはちよつと足りなかったらしい。

内からの声

◆若い世代が少ないのは残念でした。だけど、シニア世代はこれだけ未来のこと、日本や世界のことを真剣に考え、何かできないかと真面目に考えているということを示すことも出来たのではないかと。

◆五百旗頭先生や国分先生は多くの学生によびかけてくれた。若い世代を引き込むには大学の教授たちから呼びかけるのがやはり一番早道ではないか。

◆半分は義理でできてくれたのに、「意外に面白かった、来てよかったよ」と言ってもらえて嬉しかった。

◆参加した知人より「この間の会、素晴しかったよ。ただ、これからは大変だなあ」という感想を聞いた。

◆

第百回記念 実記を読む会「ビュッフェ懇親会」

百寿を祝って、大盛会であります！

十月五日、第百回記念・読む会ビュッフェ懇親会が、二十七名が参加して、国際文化会館D室で行なわれた。

泉代表、多田さんはじめ草創期のメンバーによる当会立ち上げ経緯譚は、時に鮮烈、時に混沌、「古事記」を聴く趣がありました。多田さんの「百回のうち九十八回はわが塾で・・・」のご発言は迫力満点。本当にお世話になりました。全員による一分間(?)スピーチは流石でした。遠路よりの倉藤さん、ご多忙の中駆けつけてくだ



第100回記念「実記を読む会」ビュッフェ懇親会

さった正木さんはじめ、ご参加の皆様は厚く御礼申し上げます。ただ一つ大変残念なことは、水澤先生がこの場にいらつしやらなかったことです。読む会の大きな求心力となつてこまで引つ張つてくださったことに、心から感謝いたします。

次回から、次なる「百回」を目指し、着実に「読み進む」努力を重ねる所存であります。引き続き皆様のご支援ご鞭撻を願います。

(文責) 桑名 正行

グローバルジャパン

特別研究会

グローバルジャパン特別研究会(サントリー文化財助成)は、「世界の中の日本の役割を考えるー西洋的近代化を超える思想を求めて」をテーマに、これまでに六回開催されたが、新年も五月までの予定で行うので、参加希望者は事務局まで申し込みください。

当面のスケジュールは左記の通り・・・

第七回研究会

日時：二月十六日(火)

場所：国際文化会館

テーマ：「私なりに見た『東洋医学と西洋医学』の比較」

講師：西井易徳氏(当会会員)

大阪大学薬学研究所卒、薬学修士、医学博士。中外製薬の研究所所長、取締役を経て、現在は東京農業大学客員教授など。著書に「ビタミンDーその新しい流れ」、「カルシウムと骨」など。

第八回研究会

日時：二月二十日(火)

場所：国際文化会館

テーマ：「食欲から知足へ大転換をー仏教経済思想に立つて」

講師：安原和雄氏

一橋大学経済学部卒、毎日新聞社入社、論説委員などを経て、足利工業大学教授。現



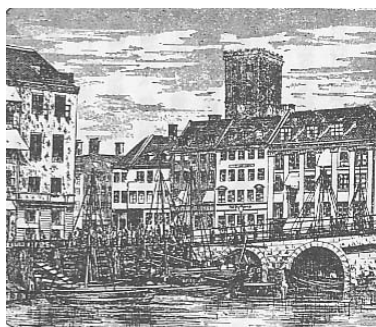
山崎渾子先生を講師に迎えた第5回グローバルジャパン特別研究会(11月2日)

在は、仏教経済フォーラム副会長など。著書に、「足るを知る経済学」、「遊びの人生経済学」など。

一月十七日・新年懇親例会

テーマは「デンマーク」

当会の新年懇親例会は、毎年、岩倉使節団が訪問した国々をテーマにして催しております、ここ三年はスイス、オーストリア、ベルギーと回覧してきたが、二〇〇七年はいよいよデンマークをテーマにすることに決まった。明治初年、長崎まで海底電線をひいたのはデンマークの会社であり、これを機にそれ以来の交流史に思いを馳せたい。



「コッペンハーゲン」王宮前 河岸朝市ノ繁栄(『実記』)

現未来部会報告

連絡 塚本 弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371

hiroshi.tsukamoto@jetro.go.jp

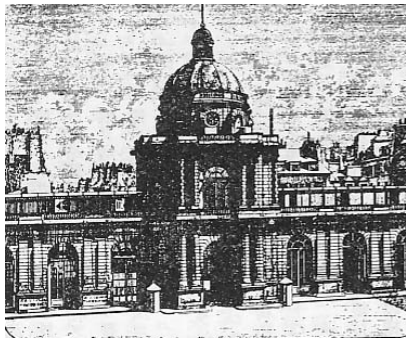


十月二十日、「これから日本を考へる」の第四回目を開催、十一月の国際シンポジウムに向けての総纏めとしての議論を行った。

結論的には、明治・大正の日本人がまず富国を目指すし、和魂洋才の心構えで急速に国力をつけ、列強に伍するところまで駆け上がった。は来たが、慢心、制度疲労というか、支那事変以降自己崩壊の道を駆け下り敗戦焦土、ゼロからの立直しとなった。

戦後日本の目指す方向は、平和国家でも、スイスを理想とする牧畜国家でもなく、経済を立て直して産業立国とする道を選択し、池田所得倍増政策の実施を契機にして目覚ましい復興発展を遂げた。その行き過ぎが昨今の、経済原理主義ともいふべき風潮や民心荒廃・道徳観の欠如を懸念される諸状況が生れてきたとの反省から、これからの日本を再生させるには、大國でも小國でもない、和を尊ぶ中の国を目指す、その根幹になるものとして、教育再生が最重要ではないかとの認識で大方が一致した。

(文責) 小田 仁彦



「リュクセン」堡宮(『実記』)

ビュット・ショーモン公園などを廻る。パリ東部の工場街も環境への配慮がなされている。これは都市計画への先見の明、つまり企業家に投資をさせ、労働者に生活の基盤・産を持たせた結果であるとの久米によるナポレオン三世の業績を讃えながら紹介。

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■第九十九回

九月七日、出席者十四名。第四十四巻パリの記(三)を星さんが解説。一八七三年一月九日、廃帝ナポレオン三世の英国での客死が記され、翌十日、ラシュエズ 墓地と

するといふ観察を繰り返す。工場経営者を対比するに、ロンドンには石炭の煙で空を暗くするが、パリでは煤煙が天を暗くすることは無い。「清浄な空気が最も健康に良い」との西井さんの持論は「近年の病院の建築には天井より空気を流通させるアメリカ様式が主流」とするベルリン大病院(第五十八巻ベルリン市の記・上)の例をひく。二月十日、蜂蜜王社の香水工場訪問、香水・石鹸・粉白粉の作り方、水銀の毒性等々。なお、『解体新書』の杉田玄白が水銀由来の梅毒特效薬で巨富を築いた話は初耳。

■第一百回

十月五日、国際文化会館にて第一百回記念のビュツフェ懇親会。詳細は九頁。

■第一百一回

十一月九日、出席者十三名。第四十三巻パリの記(二)を桑名さんが報告。一八七二年十二月二十日(明治五年十一月二十日)、パリ到着四日後、シャ

ンゼリゼーのかねて噂の「パノラマ」を見学、一驚する。二日後、「来(十二)月三日ヲ、新曆明治六年一月一日トスル」改暦の決定通知に大いに戸惑う。大統領チエールとの謁見式の場での秀逸な記事、「チエール氏当年七十五歳短小ナル老翁ニテ」、「独り岩倉公は短身で、頭蓋の大なる方であった」、「短軀両巨頭(一)二十分間対峙

の光景が想像される。

■第四十六巻パリの記(五)

を大久保さんが報告。一八七三年一月十九日フォンテンブロー王宮へ、ナポレオンがエルバ島流刑前に立ち寄った「決別の広場」を訪れる。翌二十日、鉱山学校へ、帰路リュクサンブール宮殿見学。ここで、仏国義務教育制度を概説、最高レベルENZYMEまでの解説。二十一日、フランス(国立)銀行訪問。一八六三年の銀行法全面改正に伴い、クレディ・リヨネ(C)銀行設立、その(C)の最大預金者は「ローマ法王庁」だとか、今でも「ロマンノフ王朝」の財宝が地下金庫に眠っているとかの噂、紆余曲折を経て二〇〇〇年六月東証一部(外国部)上場までを、当時出向担当の大久保さんの生々しい報告を頂いた。

■第一百二回

十二月七日、出席者十七名。第五十八巻ベルリン市の記・上を吉原さんが報告。

一八七三年三月十二日、一行は「王宮」を訪問。この王宮は第二次大戦で被災し、当時の東ドイツ政府が一九七六年に「国民の家」として新たに「共和国宮殿」を完成させたが、アスベスト汚染で閉鎖され、二〇〇二年連邦議会は、王宮の復元案を満場一致で可決した。十四日、ジームス工場を見学。ジ社の日本進出は早く、一八六一年(文久元年)、時の幕府に電信

機を献納している。現在の富士通(株)は、一九二三年、古河とジ社の、最初の日独提携に由来する、と。

補足として、先月の読む会で話の出た(明治改暦の周辺事情)に付き興味あるエピソード・メモを披露された。要は、財政苦しき明治新政府は、間一髪、新曆に切り替えることで都合二ヶ月分の給料を節約できた!外遊中の使節団一行に相談するヒマはなかった。「明治六年の政変」ならぬ「明治六年の改暦」談。

(文責) 桑名 正行

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



月一回読む会を開催、毎回担当を決めて英訳『実記』を朗読、新たに追加された注の和訳、解説の疑問点、関連情報の紹介などを行っている。

■第四十一回

九月二十一日に読む会を開催。出席者は六名で、第二巻イギリス篇の二十九章マンチェスターの記の残り、三十章グラスゴー市の記の前半を朗読した。訳者ヒリーさんの指摘もあるように、久米の説明では当時の英国の商業組織や市政に関する「コーポレイション」



グラスゴー府ノ通街(『実記』)

の意味が十分に把握できず、話題になった。

■第四十二回

十月十二日読む会を開催。新参加者もあり、出席者は八名。第二巻イギリス篇の第三十章グラスゴー市の記の残り、第三十一章エディンバラ市の記の前半を朗読。英国政治形態の議論、博物館・裁判所見学、アール・サード・シートのブロッケン現象、ホルロードハウス宮殿見学とメリー女王の話、路面機関車製造工場見学などの記述を読んだ。

■第四十三回

十一月十六日開催。出席者は八名。第二巻イギリス篇の第三十一章エディンバラ市の記の後半を朗読した。ホース、オーバッシュューズ、レインコートなどのゴム引き製品工場、ボタン・櫛製造工場や、製紙工場などの見学記を読んだ。製紙プロセスについて久米は詳細に観察描写しているが、文章では実態が分かり難く、解釈上いろいろ意見が出た。

(文責) 小林 養丈

国際部会報告

連絡 井出 亜夫



ide@gsb.nihon-u.ac.jp

報告がなされた。

◆平成の岩倉使節団の由来

中山委員長の思い(小児科医がなぜに「憲法」にのめり込んでいったか?)

医者から政治家・外務大臣に、そして憲法へ(寺島宗則・青木周蔵・後藤新平に次ぐ四人目の外務大臣!?)

一 憲法調査会の五回に及ぶ海外調査の概要

(一)平成十二年の欧州各国憲法調査

・タブーなき憲法論議/九条論議に絡む安全保障と良心的兵役拒否/憲法裁判所

(二)平成十三年のロシア等欧州各国及びイスラエル憲法調査

・東欧の民主化と憲法/各国の王制/首相公選制の問題点(イスラエル)

(三)平成十四年の英国及びアジア各国憲法調査

・上院改革(国会制度)/アジ

十月二十一日、衆議院法制局部長の橘幸信氏より「平成の岩倉使節団」は何を見てきたか、衆議院憲法調査会・憲法調査特別委員会の海外調査に随行して、として以下の

アへの訪問の意味 (四)平成十五年の米国、カナダ及びメキシコ憲法調査 ・日本国憲法の生みの親としての米国(議会機構)/超大国米国と国境を接する国の懸念 (五)平成十六年のEU憲法及びスウェーデン・フィンランド憲法調査 ・人類の挑戦としての「EU憲法」/北欧の憲法とオンブズマン

二 憲法調査特別委員会の二回の海外調査の概要

(六)平成十七年の欧州各国国民投票制度調査

・直接民主主義の国・スイス/議会制度との共存を図る国民投票制度の工夫

(七)平成十八年の欧州各国憲法及び国民投票制度調査

・各政党間の合意形成のプロセスと国民投票制度の工夫

◆おわりに

中山調査団はほぼ同一メンバーによる七回に及ぶ一大調査であった。岩倉調査団がわが国近代の制度設計に果たした役割に思いをはせつつ、この調査を通じてグローバル社会における日本のあり方を求めた。また、これを通じて与野党間の基本的理解が進んだ。

なお、膨大な調査団報告を事務局に保管してあるので、ご関心のある方はお尋ね下さい。

(文責) 井出 亜夫

歴史部会報告

連絡 小野 博正



hiro-ono@hyper.ocn.ne.jp

『日本のアイデンティティ』を求めたの第二回は九月十九日、小野博正氏による「天皇制と道教と祭天の古俗」。これは、「天皇制」と「日本」の国名は天武天皇の時代に始まり、

伊勢神宮を国家祭祀として本格化したのも、国史の編纂(古事記・日本書紀)を命じたのも天武天皇であった。天皇の名称は、道教の神、北極星=天皇大帝から来ており、天武天皇自身が、道教の崇拝者であり、日本神道は道教をモデルとして発展させたもの。道教の祖・老子は、道とは宇宙開闢の「気」すなわち、元氣であり、この道教の気は、神道でいう、穢れ(気枯れ)を祓い、気枯れた身に、氣を満たすのが、神道の清めである、その共通性を指摘。更に、皇室を中心に、発展してきた和歌は、陰陽五行の、陰陽合つて和を生じる思想からきており、和歌が生み出すもの、あわれの情緒こそ、武士道の礼と共に、まさに日本のアイデンティティーである。道(タオ) 気=神=情緒=日本と読み解いた。

第三回は十月二十日、泉三

(文責) 小野 博正

関西支部報告

連絡 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■例会報告 十月十一日、九名が参加。実記の一卷、アメリカ合衆国の部の第十五巻(編)「北部巡覧の記、中」の二百七十一頁から二百八十七頁を読む。 一行はオルバ

湖へ鉄道で西に進むが、平行して伸びるエリー運河に注目し、蒸気船や馬が船を牽引する低コストの運搬システムを観察して感心している。オントリオ湖とエリー湖と間にあるナイアガラの避け難い落差をこの運河に閘門を建設することにより直接エリー湖と結ぶことで克服し、大西洋のニューヨークから残りの四大湖を通じてシカゴまでの一貫した水路運搬を可能としたことは、絶大な経済効果を生んだものと考える。(多屋氏) なお、淀川の旧態依然の人力に頼る挽き舟をそれと比べ、久米は「今や恥ズベキア覚ブ」と言っている。 後に明治政府は実際に淀川の大改修に取り組むが流砂の増加もあり、結局淀川の河川水運は鉄道に取って代わられた。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。
- 事務局** 「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp
TEL: 0426-46-3310
FAX: 0426-45-8700

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
書籍・DVD案内も掲載

<http://www.iwakura-mission.jp>



<催し案内>

2007年1月～2月の予定です

☆新年懇親例会

日時：1月17日(水)
18:30～20:30(開場18:00)
場所：シティクラブ・オブ・東京
港区赤坂7-3-38 プラスカナダB1F
03-3401-1291
テーマ：デンマーク
*駐日大使ご夫妻もご列席の予定です。
会費：10,000円
*ご同伴を歓迎いたします。

☆グローバルジャパン特別研究会

日時：1月16日(火) 18:00～21:00
「私なりに見た『東洋医学と西洋医学』の比較」(講師：西井易徳氏)
2月20日(火) 18:00～21:00
「食欲から知足へ大転換を一仏教経済思想にたつて」(講師：安原和雄氏)
場所：国際文化会館

☆実記を読む会

日時：1月11日(木) 18:30～21:00
2月8日(木) 18:30～21:00
場所：国際文化会館 Eルーム

☆英訳実記を読む会

日時：1月25日(木) 18:30～21:00
「Vol. II BRITAIN」
Ch. 31 A RECORD OF EDINBURGH ～
Ch. 32 A RECORD OF A TOUR OF THE HIGHLANDS
場所：財)統計研究会会議室
港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階

☆関西支部例会

日時：1月23日(火) 13:00～
場所：大阪凌霜クラブ会議室
会費：1,000円(昼食はありません)
一例会の後、新年懇親会—
場所：大阪弥生会館(06-6373-1841) 16:30～
会費：4,500円(女性4,000円)
*次回からの例会はこの弥生会館となります

編集後記

〇二〇〇一年の特集号以来の増頁となりました。前回の国際シンポジウムでは、その記録が「岩倉使節団の再発見」(思文閣出版)として発刊され、当会の実力を広く伝える有力な媒体となりました。今回もセミナー、公開フォーラムのすべての記録の文書化がすすんでいます。また、デジタル・カメラによる膨大な量の画像もすでに整っていますので、会員のみならず一般の方々へ届けることができたらいいなと、若い世代への働きかけの必要性が多くの方から指摘されています。当会には青年部会があり、十月二十八・二十九日に三浦海岸のホテル・マホロバマイズにて今後の活動・運営について話し合う合宿が行われました。そして、十二月一日に例会実施、三月にはセミナーを予定と、時間確保が困難な状況の中で着実に歩を進めています。近い将来、その成果が当会全体の活動に生かされる日がくると確信しています。◇今回の国際シンポジウムで、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の評価が極めて高いことを改めて感じました。一人でも多くの方に推奨していただきたいと思えます。(N)